

# 常に前へ 最年少「冒険家」の針路

## 学生・冒険家 南谷真鈴

2020/10/28付 | 日本経済新聞 朝刊

「エベレストへ 女子高生挑む」。2014年の暮れ、日本人最年少で世界最高峰の頂上に立つという17歳の夢を新聞が取り上げた。それから6年、早大生の南谷真鈴（23）はエベレストなど7大陸最高峰と北極点、南極点を踏破する「冒険家グランドスラム」を世界最年少の20歳で達成したが、いま本人に冒険家という意識はない。「自分の今後をゼロから考えた」という針路はどこに向くのか。



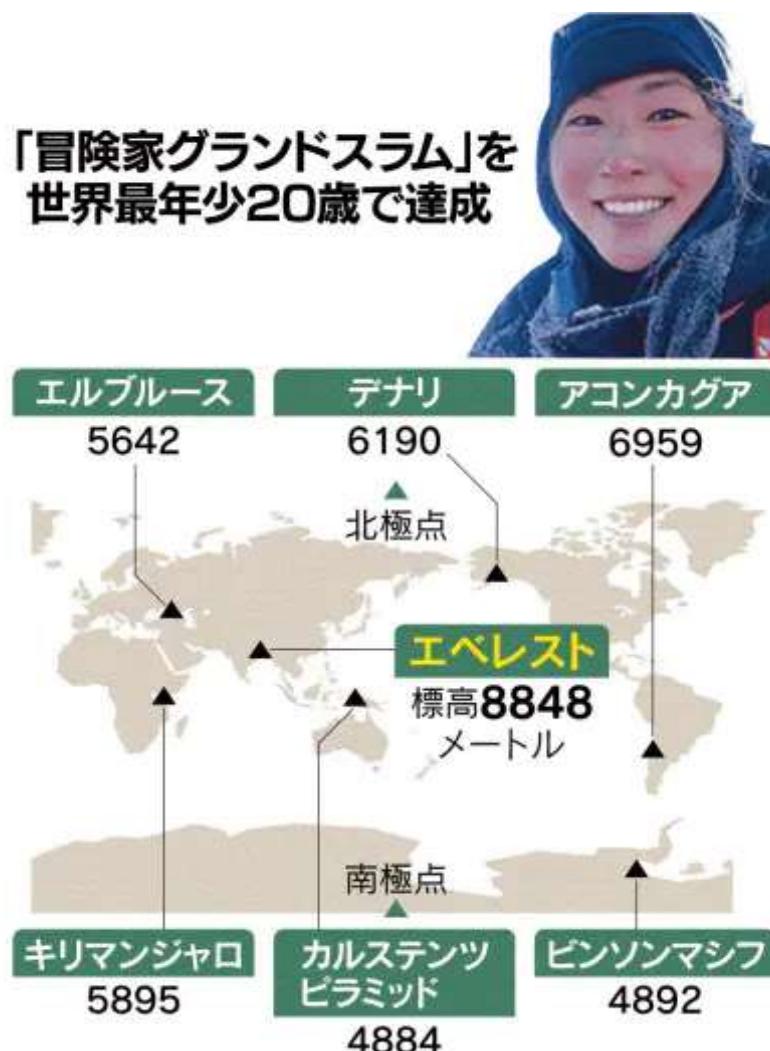
寺沢将幸撮影

世界で約50人しかいないグランドスラムを達成したばかりの17年初夏、南谷は単身、南アフリカに渡っている。セーリング技術を身につけるためだ。「ヨットで世界をめぐり、自身の経験を伝えることで困難な状況にある子どもたちを勇気づけたい」。プロの操縦士を育成す

る現地の海洋学校に入り、8人乗りヨットでマダガスカル島まで往復するなどの実践的なトレーニングを積んだ。

ところが、約1年間の南ア時代に気持ちが揺らぐ。「ヨットで世界各地に寄港しながら活動すると3年はかかる。20代の貴重な時間を費やしていいのだろうか」。グランドスラムからヨット世界一周へと冒険家のキャリアを真っすぐ歩んでゆくように見えた南谷だが、エベレストを目指した17歳の原点にはもっと複雑な心象風景が広がっていた。「この心の中のモヤモヤを乗り越えたい」

国際的に通用するようにと英語のマリン（海）と同音の真鈴（まりん）と名付けたのは貿易業をしていた父だ。南谷は物心つかぬうちから思春期までマレーシアと中国の大連、上海などアジア各地で暮らした。大連のインターナショナルスクールでは唯一の日本人生徒だった。「私は何者なんだろう」。同級生に反日感情をむき出しにされ、戸惑うこともあった。



思春期の多感な内面を支えてくれたのが登山だ。「自分と向き合って、瞑想（めいそう）に近い感覚になれる」。当時住んでいた香港からヒマラヤ山脈に足を延ばし、ひときわ高くそびえるエベレストを見た瞬間に魅入られた。「ここに登りたい」という強烈な感情が湧いた。だが、父から資金サポートは得られず、少なくとも数百万円かかる登頂費用の壁は厚い。

「諦めれば一生後悔する。その方が苦しい」。単身帰国した南谷はインターネットで「エベレスト 日本人 最年少」と検索してみた。世界最年少は13歳だったが、日本人は20代。その日から女性活躍や企業の社会的責任（CSR）を掲げる企業にメールを送り続けた。「私は必ずエベレストに登り、日本人の最年少記録を塗り替えます」

期待をかけたメール作戦がなしのつぶてだった一方、熱意は人づてに伝わり、早大入学後に思わぬ人物が手を差し伸べてくれた。ファーストリテイリング会長兼社長の柳井正（71）だ。南谷は「目つきが鋭いけれど、その中に優しさがあった」と第一印象を語る。壮大な目標で自らを鼓舞しつつ「ユニクロ」を世界に通用するブランドに育て上げた柳井。困難にひるまず「前進あるのみ」の南谷に自身を重ねたのかもしれない。

南谷はユニクロの特注ダウンを着て19歳5ヶ月で世界最高峰8848メートルに立ち、同社と「グローバルブランドアンバサダー」の契約を結んだ。「常に高いチャレンジ精神を持ち、常識にとらわれない挑戦をし続ける南谷さんは、まさに『ユニクロ』が目指す姿」。柳井はこんなコメントを出している。

そして今、南谷はビジネスに強い関心を寄せる。世界のオリンピック級の女性アスリートをビジネスリーダーに育てるプログラム「WABN」で日本代表の2人に選ばれた。国際的なコンサルティング企業グループ、アーンスト・アンド・ヤング（EY）の女性幹部とマンツーマンで能力開発に集中している。

このほか英スタートアップ企業、アンシンクでインターンとして働く。目下のプロジェクトは新型コロナウイルスの「新常態」におけるコーチング手法の構築だ。登山のチームは一皮むけば自我のせめぎ合いだった。組織力が問われるビジネスの現場でリーダーはどうあるべきか、自身の内面と向き合う。

ビジネスに舵（かじ）を切っても、南谷を前へ前へ突き動かしてきた思いは変わらない。「自分の名前で自分の人生を生きられるのは1回だけ」。初めて見たエベレストは8000メートル峰の連なるヒマラヤでも圧倒的な威容だった。ビジネスの世界でこれから見つける最高峰も、絶対に諦めない。

(敬称略)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.